

「不快指数85」

荒木 勇人

タイトル「不快指数，85」

私（M）「これから私が語るのは1985年夏のこと。追憶と酷暑、及びそれらが誘発した殺人の衝動について」

○電車・車内（夕）

ガラガラの車内に一人で座っている私。

私（M）「久方ぶりの自由を得た私は、ふと思立って少年の日の思い出の地を訪れることにした」

○住宅街（夕）

西日に揺れる陽炎、ひぐらしの鳴き声。

私、汗を拭いながら歩いている。

私（M）「馴染みの深い閑静な住宅街を北に進むと、やがて祖父母の旧居が見えてくる」
私、立ち止まる。

○祖父母の旧居・外観（夕）

2階建ての古い一軒家。

私、家を舐め回すように見物している。

私（M）「今ではあまり見られない砂壁に、

風が吹けばガタガタと鳴る型板ガラスの戸」

隣人が2階の窓から私を怪訝な表情で

睨み、ブツブツと何かを呟いている。

私「…息子さんはお元気ですか」

と、睨み返す。

隣人は私に向かってガラス製のフォト

フレームを投げつける。

地面に落下して割れたフォトフレーム

の中に、6歳ぐらいの男児の写真が。

私、それを見下して踏み躪る。

隣人、怒り任せに窓を思い切り閉める。

私、再び家を眺め入る。

僅かに戸口が開いていることに気付き、

隙間から中を覗くと人影が見える。

私（M）「…何者かが、中に。私と祖父母の

思い出に、何も知らない余所者が土足で上

がり込んでいるのか。その時、私は激しい

嫉妬と憎悪に苛まれた」

私、扉を開けて中へ入っていく。

○同・内（夕）

私、大きく鼻で息を吸って身震いする。

私（M）「懐かしいその匂いに、私は思わず
軽い眩暈を覚えた」

軋む床を静かに踏みしめながら台所に
立つ人影のもとに近付いていく。

私（M）「何人足りとも、私の思い出を冒流
してはならない。そう思い知らせなければ。
人影に近づくにつれ憎悪は増幅し、やがて
それは明らかな殺意へと変貌を遂げた」

増幅するラジオの音声、ひぐらしの声。
陽炎のように揺れてボヤける私の視点。
人影の背後に立って、その場にあった
重厚な置き時計を手に取り振り上げる。
振り返った人影、私の祖母で。

私、一瞬躊躇う。

私「おばあちゃん……？」

人影「アンタ、誰や……？」

私、突然血相を変えて頭部をめがけて
置き時計を振り下ろす。

祖母が倒れた後も馬乗りになって一心
不乱に殴打を続ける。

机の上に飾られた、少年の日の私と祖
父母の写真が落下する。

ドンドン響く鈍い打撃音はやがて骨の
碎ける籠った音に変わり、グジュツと
何かが潰れる音で途絶える。

私、大きく鼻で息を吸って身震いする。

私（M） 「懐かしい匂い」

× × ×

（フラッシュ）

血を流して倒れる6歳ぐらいの男児を
見つめる少年の日の私。

× × ×

私、血の海に溶けた顔の原型を止めて
いない祖母を見つめる。

私 「お前こそ誰だ」

了